

2 年次「総合的な学習の時間」の実施とその評価

－総合学科 8 期生の韓国校外学習－

3 年次 福原行也・後藤巻子・竹内義晴
倉井庸維・金城幸廣

昨年度の本校研究紀要に総合学科 8 期生の韓国校外学習の計画を発表した。本研究はその続報であり、2003 年 3 月に実施した韓国校外学習の内容とその評価をまとめたものである。これまでの韓国校外学習と大きく異なる点は、韓国校外学習が「総合的な学習の時間」に位置づけられたことである。韓国東北部の江原道を訪問したこと、そしてこの地域でホームステイを行ったことも新しい試みであった。このような相違点を中心にまとめた。韓国校外学習の評価は、日本・韓国イメージ調査、感想文、そして個人研究の三点から分析を行った。

キーワード：総合的な学習の時間、異文化理解、問題解決能力、韓国、校外学習

1. はじめに

本校は学習指導要領を 1 年先取りし、平成14年度から「総合的な学習の時間」を教育課程に取り入れた。総合学科 8 期生は「総合的な学習の時間」を 2 年次に 1 単位、3 年次に 2 単位実施することになった。

昨年度の本校研究紀要に「2 年次『総合的な学習の時間』の指導計画と取り組み」と題し、韓国校外学習（平成15年 3 月11日～15日実施）へ向けて週 1 時間の「総合的な学習の時間」をどのように計画を立て、実践したかをまとめた。主に次のような内容であった。

- ・担任団による韓国講座
- ・留学生講演会
- ・留学生によるハングル講座
- ・芸術鑑賞会
- ・キムチ講習会
- ・学習ノートによる韓国学習
- ・個人研究
- ・個人研究発表会
- ・ホームステイ事前学習

新たに計画した芸術鑑賞会（歌舞伎鑑賞）、キムチ講習会、学習ノートによる韓国学習はどれも生徒に好評であった。韓国文化の理解、日本文化の再発見という点で有意義であり、「総合的な学習の時間」を国際理解教育で行った場合の有益な知見が数多く得られた。

本研究はその続報であり、2003 年 3 月に実施した韓国校外学習の実施のようすとその評価をまとめたものである。

総合学科 8 期生は平成15年 3 月11日から15日までの 4 泊 5 日で、ソウルという韓国都市部と江原道（カンウォンド）という韓国郊外を訪問した。江原道ではホームステイと地元高校生との交流会を行った。この韓国校外学

習も「総合的な学習の時間」の一環であり、その流れで評価を試みた。

学習指導要領の「総合的な学習の時間」のねらいは次のように記されている。

- 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにすること。

この目標達成のためにすべての学習活動が行われなければならないが、カリキュラム評価をわかりやすくするために観点を「問題解決」「多様な学習形態」「超既存教科枠」「自己の在り方生き方」のように設定するのはどうであろう。この四観点が達成されたとき学習指導要領のねらいの実現に一步近づいたと言えるのではないだろうか。

2. 2 年次校外学習の実施

(1) 日程及び訪問地概要

国際理解・異文化理解をテーマとした校外学習を実施するにあたり、用意された観光用異文化でなく、本物の異文化体験をさせたいという趣旨により、今回はホームステイ体験を取り入れた。そしてホストファミリーをソウル郊外の家庭に求めた結果、現地旅行社を通じて紹介された地区は江原道（カンウォンド）の江陵（カンヌン）という地域であり、仁川空港から数百 km 離れた地区であった。日程の決定にあたり、最も苦心したのはこの距離への対処であった。日程について考慮したことを次にあげる。

- a) 移動距離による疲労を考え、バス移動の距離を極力減らした日程にする。

- b) ホームステイの感動を生徒同士で話題にして共有して欲しいので、日程の前期に組み入れる。
- c) ソウル班別自由市内見学は帰る前日とし、昼食をはさんで一日とる。
- d) 食事はなるべくホテル内でなく外食とし、現地の食事内容や食事風景に触れるようにする。
- e) 平和教育となる内容を一点盛り込む。
- f) 1年次より、文化的行事を取り入れられる生徒像を創り上げてきたので、伝統芸能を鑑賞させる機会を作る。
- g) 交流会相手の高校の生徒宅がホストファミリーという生徒も居たので、ホームステイホームステイの翌日に高校との交流会を組み入れる。(これは叶わなかった)

表1【校外学習日程】 ※韓国内の移動は専用バス

月日	地 名	内 容
3/11 (火) 第 1 日	京成上野 成田空港着 発 仁川空港着 水原 ドラゴンバレー ホテル着	6:30 集合 スカイライナー 〈列車内で朝食〉 空港着、開校式 JL9:45発 〈機内で軽昼食〉 12:25 仁川空港着 韓国民族村 〈ドライブインで夕食〉 室長会議〈ドラゴンバレー泊〉 ホームステイ参加者荷物まとめ
3/12 (水) 第 2 日	ドラゴンバレー 江陵 文成高校着 江陵市役所 ホテル着	8:00 ホテル発 韓国文化体験教室 ①師任堂コース 礼法施設師任堂で全員チマ チョゴリを着装して作法体験 ②船橋荘コース 船橋荘庭園で韓国伝統演奏体 験と烏竹軒、北朝鮮潜水艦見 学 〈途中合流して昼食〉 江陵文成高校との交流会 ホームステイ参加生徒は荷物を 降ろして降車し、ホストファミ リーと対面、各家庭へ向かう 〈ホームステイで各家庭泊〉 韓国の文化について講演聴講 室長会議〈ドラゴンバレー連泊〉
3/13 (木) 第 3 日	江陵 江陵市役所 ソウル 統一展望台	8:00 ホテル発 9:00 ホームステイの生徒を乗 せてソウルへ向かう バス内で、班ごとホームステイ の状況を紹介し発表する。 〈ソウル市内で昼食〉 14:00 統一展望台で北との国境 を見学 〈ソウル市内で夕食〉

	ホテル着	室長・自主見学班長会議 〈ソウル泊〉
3/14 (金) 第 4 日	ソウル 景福宮駐車場 貞洞劇場 ホテル着	8:00 ホテル発 景福宮へ 班員と自由見学ガイドと対面 9:00 自主見学出発 15:30 班ごと貞洞劇場前へ 16:00 伝統芸能見学 〈ソウル市内で夕食〉 室長・自主見学班長会議 〈ソウル市内ホテル連泊〉
3/15 (土) 第 5 日	ソウル 景福宮、国立 民族博物館 仁川空港着 発 成田空港着	8:30 ホテル発 景福宮へ 景福宮、国立民族博物館見学 空港へ JL14:40 発 16:55 着、開校式、 解散

1日目の反省点

- a) 初日に移動距離が長く心配したが、途中にいわゆる観光地の民族村で時間をとったことで、生徒も引率側も精神的気楽かつ肉体的にも良い気分転換となった。
- b) 乗り物酔い等考え、初日だけ一気にホテル到着後の夕食を希望したが、時間的に途中での夕食となった。
- c) 翌日がホームステイであるため、荷物をまとめたり、翌日朝に、クラス号車とは異なる号車のバスに荷物を積み込むことなどを考慮して準備させることが生じたが、事前に意識付けを行い問題なく実施できた。
- d) 翌日はホームステイ参加生徒分のホテルの部屋を空ける必要が生じ、部屋割りの種類が多くなった。これについても、事前の準備で問題なく実施できた。

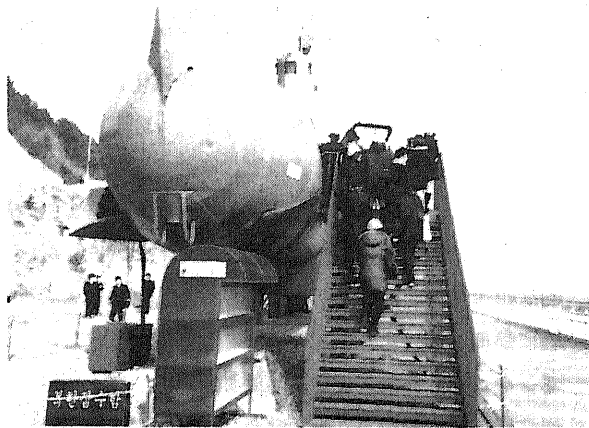
◇2日目の反省点

- a) 師任堂コースでは、韓国式のお茶点前ともいべき作法を韓国の女性と同様に指導を受けた。もてなし方についてや成人女性となるための心構えを学んだ。またチマチョゴリの装着とその礼儀作法について、丁寧に講習をしていただいた。生徒は大変に熱心で意欲的な態度で臨み、決して失礼のない受講生であったと思う。正座にも必死に耐えていた。チマチョゴリは原色使いで大変心浮き立つ美しさがあり、生徒の一番の思い出となるに相応しい勉強会になったように思う。
- b) 船橋荘コースへは、すべての男子と一部の女子が参加した。

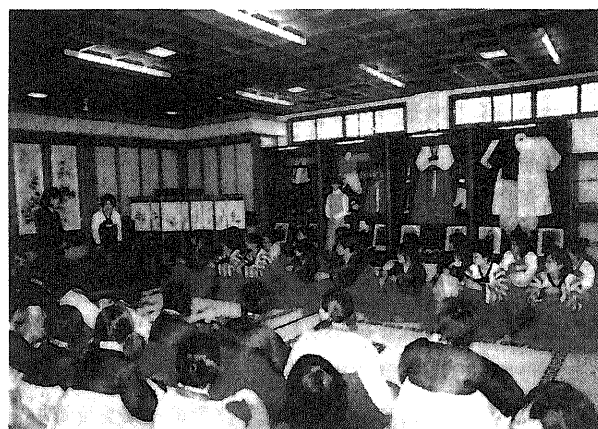
北朝鮮からの潜水艦を見学した。激しい戦闘の様子が、残された潜水艦から潜水艦から何うことができた。また、海岸線には鉄条の線が張られ、監視する兵士の



韓国民俗村



北朝鮮潜水艦



師任堂作法体験



江陵文成高校交流



ホームステイ先の家族と



班別自主見学（ソウルの街へ出発）



統一展望台（向こうは北朝鮮）



景福宮

姿も見られた。烏竹軒の訪問では、学問に優れた業績を上げた栗谷とその賢母を尊ぶ韓国の文化を改めて認識することができたとともに、500ウォン札の絵柄をバックに写真撮影することは生徒にとって良い思い出となったことであろう。

3番目に大変大きな屋敷船橋荘を見学し、庭で伝統的な韓国舞踊を披露していただき、最後には生徒も舞踊に参加した。また、地方のTV局が取材に来ており、インタビューを受けていた生徒もいた。

- c) 昼食時の合流やバス号車の乗り換えなども計画の通りに行われた。
- d) 江原道の文成高校は、今までに交流会の経験がなく、外国からの訪問を受けることも皆無であったためか、韓国の国民性が感じられる熱狂的な歓迎を受けた。前半の全体交流会のステージ、後半の1時間の生徒同士の交流も順調で、交流会は概ね計画通りに成功を収めることができた。
- e) ホストファミリーとの対面は現地市役所の大ホールを借りて現地スタッフの方がスムーズに全員を引き合わせて送り出してくれた。
- f) ホームステイ参加者とは異なる形であるが、韓国の文化を知るための講演をガイドの方をお願いした。生徒は真面目な態度ではあったが、旅の疲労が見え、講演は予定時間を切り上げるようになった。

◇3日目の反省点

- a) ホームステイ参加生徒は、ホストファミリーに送られて予定時間に合流した。表情から満足感が伺えたのは生徒だけでなくホストファミリーからも感じられた。送り出すまでは荷物の管理など指導したが、ホストファミリー宅へ小物の忘れ物をしてきた生徒が何人か居り、再度現地スタッフの方の手を煩わせることになってしまった。
- b) 感動の共有とバス内での長時間を埋める意味を含め、各班長にホームステイ紹介を発表させた。ホストファミリーの家族構成や行動、食事の様子などを中心に、クラスメイトからの感動紹介が行われた。
- c) 疲労の蓄積で、ソウル市内までの長時間のバス移動を大変心配したが、逆に生徒にとってはこれを睡眠時間に充てることができ、好条件となったようであった。
- d) ソウル市では統一展望台まで足を伸ばした。唯一平和教育の意味と休戦状態にある緊張感を感じられる場であり有意義であった。
- e) 自主見学前日であるため、班長会議も開催し注意を徹底させた。疲労と季節の影響もあり、発熱を訴える生

徒も何人かおり、対策も考えた。

◇4日目の反省点

- a) 自主見学は、楽しみにしているイベントであるためか、生徒全員が参加した。見学の班に一人ずつ、現地の旅行ガイド勉強中の方についてもらった。互いの目的が一致しており好評であった。問題点は班員が10名で見学班としては多いことである。またメンバー構成としても問題は多少感じられた。
- b) 見学を午前から午後にかけてとったため、食事を選び注文することも生徒にとって楽しみであり学習となった。
- c) 出発と集合の場所が異なったが、問題はなかった。時間に余裕で集合した班が多かった。

全日程を振り返ってみると、生徒は様々な課題を意欲的にこなし、大変有意義な時間を共有し合い、異文化理解・国際理解を獲得したと思われる。体調を崩しかけた生徒もいたが、移動距離の長さで緊張したことの勝利かもしれないといえるほどにいとおい熱心さであった。

また今回、作成されたしおりを見て感じたのは、生徒に語学に関する内容を盛り込もうとする傾向がより強くみられたことである。例年の語学学習の成果を反省し、語学への意識付けを早くから行い、専門業者による語学学習を事前準備学習の後半に集中させ、意識を高めたねらいは的中し、積極的に会話してみよう、交流してみようという意欲が見られた証拠の一つとして嬉しく思う。

(2) 江原道

「ホームステイをする家庭はソウル市内の近代的な集合住宅をなるべく避けたい」「ホストファミリーと交流会の高校生宅がなるべく共通」という依頼によりマッチングをしてもらったのが江原道の地区であった。地図上の想像を上回る距離を隔てた地区であり、それだけに観光地化されておらず、純粋な韓国の国民性を絵に描いたような人々に大歓迎を受けることとなった。準備していた年はワールドサッカーを翌年に控え、江原道近くに飛行場計画があるという知らせもあったが、期待通りにはいかなかった。輪をかけてソウル金浦空港から仁川空港が新規開港され、より遠くなって我々校外学習の一行を迎えることとなった。

江原道は山間の地域にあり、宿泊地を選んだドラゴンバレーは更に標高の高いスキーリゾート地である。「東京に着いて蔵王まで出かけるようなものです」という説明で納得できる。観光にこれから力を入れていきたいという思いを旅行社を通じて伝えてきてくれたが、その思

いは様々な場面に感じられた。

2日目の日程に組まれていた文化体験の場所として使わせてもらった師任堂は、韓国女子の神聖で健全な教育施設であり、この場所を我々のために開放し指導してもらえたこと、チマチョゴリを今回のために40着も購入してもらったことなど、決して二つ返事で叶ったわけではない。江原道にはもともと観光のために揃えあるものは何一つなく、本校からの校外学習の異文化理解体験として要望した内容を十分に理解してもらい、国内および現地旅行業者が江原道知事にまで働きかけをしてもらって実施が可能となったということである。一つ一つを着実に現実化してくれた当地の方々の努力と厚意に感謝する。

交流会の相手校となった文成高校は、この地区にある忠孝、礼儀、道德教育を教えとする伝統的な学校である。ソウル市内の高校の多くと異なり、文成高校は交流会の経験がなかったが、その事実を不安材料ではなく見方につけ、本校主導で歓迎会の計画を進められた。当日文成高校に訪問し仰天してしまった。熱烈歓迎ぶりは日本人のいつの時代の何様を迎える出来事を例にすれば良いか思いつかないほどであったからだ。現地のTV局が交流会とホームステイの取材に来ており、事前に放送して紹介されていた本校の訪問が熱狂ぶりにつながったようである。

(3) ホームステイ

ホームステイの意義と実施計画を生徒に伝えたのは1年次の1月末の集会である。2割の生徒が希望してくれればとの予想に対し、2年次4月アンケートの段階では、関心をもった(68%)、ねらいがわからない・関心ない(28%)、希望する(22%)、迷っている(34%)、希望していない(42%)といった関心度であった。受け入れ家庭あつてのことであり、決して強制して連れ出すつもりはなく、意義に賛同する生徒に体験してもらい、他の生徒にその感動を共有する場を組み入れるという計画であった。また希望生徒の不安に思う事柄を少しでも解消できるような準備に力を入れなくてはならないと感じた。アンケート結果の不安内容は前年度紀要に紹介したが、言葉、食べ物、反日感情、コミュニケーション etc. であった。

結果としては65名(31班)42%の生徒が参加し、我々の予想の2倍の人数であったが、生徒の参加要因はクラスを越えて気の合う仲間との参加が認められたことで希望が高まったようである。

ホームステイの準備のために行ったことは以下の事柄

である。

- a) 旅行業者からのホームステイ全般や韓国の家庭についての説明会
- b) ホストファミリー決定のための自己紹介カードの作成により意識高揚
- c) 語学学習
- d) おみやげの準備
- e) 手紙発送やEメール送信

手紙交換などは事前に何度かコミュニケーション確立を目的に計画されていたが、前年に大型台風で現地が大きな被害を受け、連絡調整が進まなかったことや、直前までホストファミリーの家庭の事情での変更などの可能性を心配して、住所やメールアドレスの報告が受けられなかった事情による。

なお、手紙作成には年次でハングル翻訳ソフトを準備し、プリントアウトしたものを用いた。日本語の文章も添えて送った。

また、韓国では日本を上回るパソコン利用率であるため、Hot Mailで生徒にアドレスを取得させ、メールを事前に出すことができた。

また、現地の旅行社にはホストファミリーとなる家庭を本校生徒の希望する班の数だけ用意しなければならず、奔走してもらった。ホストファミリー未経験が殆どで、事前に心得となる内容の説明会を開催してくれていた。説明会の内容では次のようなことが話された。

- a) 飾らず、日常の家庭の様子を見せて欲しい。
 - b) 外食をしないで、家庭料理を用意してほしい。
 - c) 布団は生徒の人数分用意してあげてほしい。(韓国では一人ずつでないことも多いそうである)
 - d) 風呂やオンドルの使い方を教えてあげてほしい。(韓国ではシャワーのみの場合が多いそうである)
 - e) キムチはおみやげに持たせないようにして欲しい。
- 以上のようなことであった。

実際のホームステイの状況を、生徒の感想から抜粋して以下に紹介する。

- f) 家庭料理をご馳走になった。食べ終わるとすぐに出かけようと誘われ、食後すぐに行動する傾向が見られた。韓国の方々は食後ゆっくり休まないようである。
- a) 車に乗って外食に行ったり、ゲームセンターに案内してもらったという生徒が大変多かった。また、夜遅くまで開いている所が多かった。また、他のグループと外出先で一緒になった班もあった。
- b) 夜遅くに学校から帰ってきた高校生が、すぐに今から塾に行くんだといって出かけて行って驚いた。勉強を

何時間も夜遅くまで行こうという高校生事情が本当であったということだ。

- c) 交流会の有志として盆踊りを披露した生徒は、荷物にあった浴衣をお母さんに着せてあげて写真を撮り、とても喜んでもらったそうだ。こういった機転のきく行いには大変感動する。
- d) ネット事情は進んでおり、ホームステイ中に本校のホームページを見せて紹介した生徒があった。このような使われ方は今後、旅行先がどこに変更された場合でも同様に利用が期待できると思われる。

説明会と反する内容もあったが、韓国の家庭に一泊したことで、生徒は懸命にコミュニケーションをとり、韓国の生活時間など想像以上の異文化を感じ取ったに違いない。同じ高校生として、日本人像を客観的に見ることにつながったのではないだろうか。1年前の担任団の韓国異文化紹介講義に始まり、1年間の個人研究の展開に加えて、現実に触れた韓国の現実で締めくくる校外学習「異文化理解」研究は充分価値あるものとなったであろう。

(4) 北朝鮮

日本には国境はないが、韓国には国境が存在する。1945年日本が太平洋戦争において敗戦を向かえ、朝鮮半島はアメリカと旧ソ連が38度線を境に分割占領されていたが、1948年に民主主義を掲げる南の韓国と社会主義を掲げる北朝鮮とが相次いで独立を宣言した。その後1950年朝鮮戦争が始まり、1953年に板門店で北朝鮮、中国、アメリカを中心とした西側で休戦協定が調印された。しかし、当時の韓国大統領は休戦協定に調印しなかった為、朝鮮半島が戦争が一時休止している状態にすぎないのである。その緊張状態が今まで続いている。江原道においても休戦ラインは存在しており、鉄条網がはられた海岸線や「統一公園」に展示されている、北朝鮮の潜水艦や海軍艦艇や潜水艦の遺留品は朝鮮南北分断の悲劇の例として有名である。また、今回訪問した「統一展望台」は南北分断の現実を実感することができ、国境の存在・悲劇を間近に見学することができた。

3. 2年次校外学習（韓国校外学習）の評価

(1) 日本・韓国に対するイメージの変容

a) イメージ調査について

生徒が日本と韓国に対してどのようなイメージを持っているか、校外学習の前後で日本と韓国のイメージがどのように変化するかを調査した。調査内容は次の5点である。

- ① 海外に行ったことがあるか
- ② 日本・日本人についてどう思うか（好き・嫌い）
- ③ 韓国・韓国人についてどう思うか（好き・嫌い）
- ④ 「日本・日本人」で連想するもの
- ⑤ 「韓国・韓国人」で連想するもの

調査の実施時期は校外学習前（事前調査と呼ぶ）は1年次の終わり、校外学習後（事後調査と呼ぶ）は3年次の始まりである。事前調査と事後調査の実施年月を次に示した。事前調査と事後調査の1年1ヶ月に、校外学習事前学習・校外学習テーマ研究・校外学習・校外学習事後指導が存在する。事前調査と事後調査を比較することによって、韓国に関する学習・研究・体験が日本と韓国のイメージにどのような影響を及ぼしたかを明らかにすることができると思った。

事前調査→ 2002年3月

事後調査→ 2003年4月

b) 海外体験

1年次末の時点で「海外に行ったことがある」生徒は10.1%、「海外に行ったことがない」生徒は89.9%であった。

c) 日本・韓国に対する好き嫌い

「日本・日本人をどう思うか」「韓国・韓国人をどう思うか」という形で日本及び韓国に対する好き嫌いを聞いた。好き嫌いの程度は7段階の評定尺度法を用いた。7段階は「非常に好き」「かなり好き」「やや好き」「どちらでもない」「やや嫌い」「かなり嫌い」「非常に嫌い」を設定した。

調査結果を概観するために「非常に好き」「かなり好き」「やや好き」の数値の合計を「好き」としてまとめた。同じように「やや嫌い」「かなり嫌い」「非常に嫌い」の数値の合計を「嫌い」とした。「好き」「どちらでもない」「嫌い」の割合の事前調査と事後調査の変化を表2にまとめた。

表2 日本・韓国に対する好き嫌いの変化

単位 (%)

		好 き		どちらでもない		嫌 い	
		変 化	差	変 化	差	変 化	差
全 体	日 本	50.7→	16.9	41.9→	-16.0	7.4→	-0.9
		67.6		25.9		6.5	

全 体	韓 国	13.5→ 43.4	29.9	73.6→ 35.8	-37.8	12.8→ 20.8	8.0
	日 本	39.3→ 61.9	22.6	48.2→ 26.2	-22.0	12.5→ 11.9	-0.6
男 子	韓 国	14.0→ 50.0	36.0	66.7→ 32.5	-34.2	19.3→ 17.5	-1.8
	日 本	57.6→ 71.2	13.6	38.0→ 25.8	12.2	4.3→ 3.0	-1.3
女 子	韓 国	13.2 39.4	26.2	78.0→ 37.9	-40.1	8.8→ 22.7	13.9
	日 本						

日本・日本人に対する好き嫌いの変化は、全体では「好き」が50.7%→67.6%、「どちらでもない」が41.9%→25.9%、「嫌い」が7.4%→6.5%であった。数値上では「どちらでもない」の減少した分が「好き」の増加に回った格好になった。男女別でも同様の傾向が見られたが、男子で顕著であった。男女共に日本・日本人の良さ等を認識し、これがいまいだった態度に影響し、「好き」の増加につながったと考えられる。

韓国・韓国人に対する好き嫌いの変化は、全体では「好き」が13.5%→43.4%、「どちらでもない」が73.6%→35.8%、「嫌い」が12.8%→20.8%であった。「どちらでもない」が減少し「好き」が増加した。日本・日本人に対する好き嫌いの変化と同様の傾向が見られたが、増加減少の程度は、韓国・韓国人に対する好き嫌いの変化の方が大きかった。日本・日本人に対する好き嫌いの変化と異なる点は「嫌い」の割合にはっきり表れた。韓国・韓国人に対する「嫌い」は12.8%→20.8%と変化し、増加した。

韓国・韓国人に対する「嫌い」を男女別で見ると、男子は19.3%→17.5%と減少しているにもかかわらず、女子では8.8%→22.7%と大きく増加している。韓国・韓国人に対する好き嫌いの変化のうち、女子の「嫌い」の変化が異なる方向にある。

d) 連想

「日本・日本人」「韓国・韓国人」で連想されるものを各々3つ挙げさせた。集計結果の上位5位までを表3と表4に示す。寿司・天ぷら・そば・おせち等和我系の回答を「和食」としてまとめた。また、親切・冷たい・まじめ・強い等、人種の性格や性質に関する回答を「性

格・性質」としてまとめた。

事前調査・事後調査とも1位に変動はなく、「日本・日本人」から連想するものは「和食」であり、「韓国・韓国人」から連想するものは「キムチ」であった。どちらも食に関するものであった。

事前調査と事後調査で順位に大きな変化が見られたのは、「性格・性質」であった。事前調査では「日本・日本人」が4位、「韓国・韓国人」が5位であったが事後調査ではどちらも2位へと躍進している。また、「日本・日本人」から連想するものとして、事前調査では「富士山」が2位であったが、事後調査では4位に下がっている。連想するものが目に見える自然よりも、内面的なものへ移行していることがわかる。

「性格・性質」の中身を詳しく見ると表5のようになる。事前調査では「日本・日本人」「韓国・韓国人」ともにマイナスの連想が多いが、事後調査では表現が多彩になっていると同時にプラスの連想が増加している。

また、事後調査では「日本・日本人」と「韓国・韓国人」で対照的な表現が目立つ。「日本・日本人」と「韓国・韓国人」の順に例をいくつか次に示す。

消極的－積極的
静か－騒がしい
暗い－明るい
閉鎖的－開放的
人見知り－人見知りしない
あいまい－はっきりしている

表3 事前調査における連想 () は度数

	「日本・日本人」	「韓国・韓国人」
1位	和食 (70)	キムチ (114)
2位	富士山 (43)	焼肉 (47)
3位	着物 (36)	ハングル (26)
4位	性格・性質 (23)	のり (20)
5位	侍 (13)	性格・性質 (15)

表4 事後調査における連想 () は度数

	「日本・日本人」	「韓国・韓国人」
1位	和食 (92)	キムチ (101)
2位	性格・性質 (60)	性格・性質 (96)
3位	着物 (38)	焼肉 (28)
4位	富士山 (24)	ハングル (26)
5位	侍 (8) 金持ち (8)	のり (21)

表5 「性格・性質」の詳細

「日本・日本人」		「韓国・韓国人」	
事前調査	事後調査	事前調査	事後調査
働き者	謙虚	強い	積極的
冷たい	ひかえめ	せこい	強引
派手	静か	だます	きつい
固い	真面目	にぎやか	明るい
笑う	暗い	うるさい	親切
古ダヌキ	本心をかくす	柔軟	騒がしい
集団好き		変人	熱い
自己中心	はっきりしない	細かい	感情的
道徳的		真面目	こわい
愛国心弱い	ながされやすい	よい人	感情表現豊か
堅い		こわい	ハキハキ
優しい	卑劣		体育会系乗り
yesマン	へらへら		パワー
傲慢	潔癖		元気
親切	冷たい		熱血
	消極的		物事を気にしない
	冷たい		強引
	内弁慶		行動が早い
	親切		おこる
	引っ込みじあん		話しやすい
	礼儀正しい		短気
	謝る		率直
	のんき		気が荒い
	悲観的		堅い
	あいまい		いばる
	閉鎖的		自慢する
	せっかち		開放的
	堅い		熱狂的
	自分の意見がない		激しい
	すみません		世話好き
	人見知り		人見知りしない
	気をつかう		やさしい
	気が弱い		おおざっぱ
			はっきりしている
			せっかち

(2) 個人研究

韓国に関する研究を各自興味関心に沿って研究を行った。指導は、表6のような研究計画書の書き方の説明書と研究計画書を資料として配付し、全体で指導を行った後、テーマを提出し、そのテーマ毎に担当教官を決め、ほぼ1年間弱行った。

途中分野別発表会を9月9日に行い、そこから良い発表を文化祭で発表した。黎明祭における中間発表に対する保護者の感想は、概ね良好であった。

1月末には各自論文A4版10ページ以上を担当教官に提出し、3月の校外学習終了後加筆修正した論文を提出した。提出された論文と1年間の研究態度に対して、担当教官がそれぞれ文章による評価を行った。生徒にとって、韓国校外学習の個人研究は、研究の方法を習得する良い機会だったと思われる。

表6 生徒への配布資料の1つ

平成14年6月21日 校外学習資料
研究計画書の書き方
<p>研究とは、これまでに研究されてきたことを土台に、新たな知見を付け加えることである。そこで、それまでにどのようなことがその研究分野でなされてきたのかをまとめることは、最低限必要であり、文献を読むことは欠かせない。そのため、まずは自分の研究の土台となる、主要参考文献を選ぶことが必要になる。主要参考文献を見つけるためには、「学習ノート」、「国際理解」は、参考になる。そこで見つからない場合は、「岩波ジュニア新書」、「岩波新書」、「中公新書」、「講談社新書」等「新書」を探すことは、有効である。また、前校長佐藤常雄先生が、本校図書室に寄贈して下さった新書等も参考になる。</p> <p>次に研究のタイプである。研究には、2つのタイプが考えられる。1つは、問題解決を行うことを主になされる研究である。例えば、「ガンに効く薬の開発」、「いじめをなくす方法」等であり、問題があり、その「解答」を提供することがなされる。たとえ稚拙でも問題解決のために自分の考えに基づいて「解答」を出す。それが、オリジナルとなる。</p> <p>もう1つは、これまで正しいと漠然と思われてきたことや仮説を、実際に正しかったと示すことである。これは、いわば「証明」型研究といえる。そのための方法として、アンケート調査を行ったり、実験を行いデータをとり分析することが含まれる。</p> <p>研究を2つのタイプに分けたが、実際には、この2つのタイプが融合され一緒になって行われるものも多い。しかし、いづれにしても、自分自身で考え、何か新しいことを提案したり作成し、それがどのように良いのかを他の人に認めてもらうことが必要である。</p>

<記入方法>

I. 研究テーマ：何を研究したいのか（分野や対象）が他人にわかるように簡潔に述べる。

II. 研究目的：その研究を通して示したいことを書く。つまり、最終的なゴールとなることを書く。したがって、「作成する」、「開発する」、「提案する」、「示す」、「明らかにする」、等の動詞が使われる。よく見られる「知る」という言葉は、研究として恥ずかしい。「知る」のは、誰が知るのか、それは、自分なのであり、自分が知ってそれで満足しているという自己満足を表明しているようなものである。研究は、大げさにいえば、社会的に貢献しなければならず、「みんな」のためにならなければならない。つまり、自分が知り得たことが、他の人にとって意味のあること、価値のあることが、求められる。

III. 研究方法：どのような方法によって、研究目的を達成していくのかを書く。これまで書いてきたように、先行文献を調べることは、必ずしなければならない。それ以外に、使用キーワードとしては、「比較する」、「分析する」、「観察・実験する」、「アンケート調査する」、「面接調査する」、「〇〇の立場・△△主義の観点から考察する」等を用いて、方法を記述する。

IV. 主要参考文献：著者名、題名、出版社、出版年 を書く。

例 市野川容孝『身体／生命』、岩波書店、2000年

※インターネットのWebページは、主要参考文献にはならない。

(3) 生徒の感想

交流会、ホームステイ、個人研究、校外学習に対して生徒がどのような感想を持ったかを、校外学習感想文集から抜粋した。

交流会

「1番記憶に残っているのは2日目の交流会と文化体験です。チマチョゴリは韓国に行く前から気になっていて、着られると知ったときはとてもうれしかったです。それと茶道部なので、韓国の茶道にも触れられてとても良い経験ができました。交流会では、相手の女の子がとてもがんばってる子でいい刺激になってよかったです。その女の子は、美容師になりたいから将来は日本に行って学びたい、と言っていました。なので今は日本語を学校で一生懸命勉強しているらしく、日本語がとても上手でした。卒業してからはバイトをしてお金をためて日本に行くと言っていました。私たちは夢のことを話し合ったりして、その女の子からやる気をもらえたと思います。韓国の高校生と交流できて、とても刺激しあえる子と友達になれたのがこの旅行で一番よかったことだと思います。私も夢に向かってがんばろうとやる気になりました。これから夢を叶えるために、受験や就職などたくさん超えなければいけないことがあるけれど、韓国で出会った友達のことを思い出して私もがんばっていきたいと思います。(D組女子)」

ホームステイ

「リーさんが市役所へ私達を迎えに来た。私は「アンニョンハシムニカ」と挨拶をした。リーさんは「アンニョンハシムニカ」と笑顔で言ってくれた。リーさんの車へ向かう。日本の車のナンバープレートは白地に緑数字なのが、韓国では緑地に白数字であることを発見、小さな文化の違いを感じる。遠くからはどの車も白っぽい車に見えたその車は指で絵が描けるほど砂塵が積もっていた。想像するに中国から風で運ばれた黄砂か、街の所々あった砂地からだろうか？江陵は昨年8月末、台風で大きな水被害にみまわれあったと記憶にある。街は復興途中なので砂地があり、それが原因なのか？そんな事を考えながらリーさん宅へ到着、広い庭のある白色の豪邸へ、リーさんの祖父母と婦人が待っていた、私のお土産は日本蕎麦「soba知ってるよ」と祖父母は言った。そして夕食、食卓には韓国料理がならぶメインをブルコギとしキムチ、韓国ノリなどのたくさんの副菜が並ぶ。中でもしその葉のキムチを日本通のおばあさんが説明してくれた

「japaneseshiso」印象的だ。食後お茶は甘いシロップにもち米が入っていて韓国人が大好きなシッケだ。会話は私が持参した写真やガイドブックなどを元に、知っている英単語をめいいっぱい使い学校、日本の事などたくさん話をした。そして翌朝、朝食を食べ、帰る時間。お土産に韓国海苔を頂いた。帰国後、免税店で購入したものと味比べ、私はリーさんから頂いた方が塩味が強く美味しく思った。免税店のものは日本人向けの味にしてあるように思えた。英語も韓国語もままならなかったが、リーさん家族が韓国の文化を少しでも知ってもらおうとする事に感激した。そして、私は食文化は人を介して必ず交流するということを体と視覚で感じた。その事は、ホームステイの意義を少し理解できたということだと私は思う。最後に、「平和ぼけの日本人」という言葉があるが、銃を肩に掛けた兵士をたまに目にした時、日本では経験できない平和でない地域の緊張感を感じるとともに、韓国と北朝鮮はまだ停戦中であり、今だ戦争は終わっていない事を実感した。(C組女子)」

個人研究と校外学習

「僕は、韓国校外学習の個人研究を「韓国人の反日感情」というテーマで行った。日本と韓国の間で起こった歴史的な事情により、日本人に対し嫌感意識を持つ韓国人がいるということを研究したので、校外学習は少し不安な面もあった。でも、実際に韓国へ行ってみて、そのような半日感情が全くなかったことにとても驚いた。それは、韓国人々が日韓間の歴史的な背景を知らないわけではなく、そのようなことにとらわれることのない交流をしようという考えがあるからということが分かった。日本人は韓国人に対して、とてもひどいことをしてきたのに、韓国人はすごく優しく日本人を迎えてくれたことを考えると、今回の校外学習は本当に意味のあるものだったと思う。また、異文化交流がとても大切だということがわかった。(A組男子)」

校外学習

「今回の校外学習に行ったことで、私は韓国に対する考えは大きく変わりました。私の韓国人に対するイメージというのは今まではあまりいいものではなく、どちらかというと冷たいとか自己主張が強いといった悪いイメージを持っていました。しかし実際に韓国人たちに会って、私の考えは間違っていたのだと気付きました。まず交流会では、韓国の学校の生徒達はみんなとても親切だったし、冷たいなんていう感じは全然なくて、逆に積極

的に話しかけて交流を持とうとしてくれました。韓国のその学校は厳しい学校だと聞いていたので、私達の事を受け入れてくれるかすごく心配していたのですが、あんなふうに受け入れてくれてとても嬉しかったです。交流会の中でだんだんと韓国の生徒とも打ち解け、韓国人に対する考えも変わりました。ホームステイでも、ホストファミリーの方たちはすごく優しくしてくれて、私達のために色々考えてくれていて、行く前に感じていた不安はすっかり吹き飛んでしまいました。この校外学習で学んだ事は、何事もイメージや固定観念で考えてはいけないという事です。テレビなどから得た情報だけで勝手にイメージを固め、交流の道を閉ざしてしまう、それはすごく悲しい事だと思います。もっとこちらから歩み寄りたくさんの人たちと接していく事がこれからの本当の意味での日韓交流に必要な事だと思いました。(B組女子)

4. おわりに

総合的な学習として韓国校外学習を実施することは様々な面で大変有意義であり教育的効果も大きかった。以下にまとめとして効果や課題を記したい。

(1) 効果

a) 「担任団による韓国講座」については、1年次において韓国校外学習に向けて各担任団より、それぞれの専門分野・得意分野を中心として韓国講義が行われた。生徒は大変熱心に聞いており、1年の時期に翌年の総合的な学習に向けて、個人テーマ設定に向けて取り組むことは、きわめて有意義であった。

b) 韓国留学生による「韓国講座」は例年行われていることであるが、実際に韓国で経験したことを、伝えることは異文化理解の観点から有意義である。

c) 本校における「総合的な学習」の2年次における取り組みは調べ学習のみではなく、韓国について様々な角度から教師サイドより指導していくことは、これまでにない取り組みであった。今回使用した「学習ノート」はベネッセが作成した、各学校の要望を取り入れたセミオーダー的な要素が強い。したがって当然、各時期により学習ノートを取り入れて指導を行うことは有効であった。

d) これまでの様々な角度からの指導・行事等をもとにして個人研究レポートを作成しまとめる作業を行った。個人研究レポートは生徒がそれぞれの立場から興味・関心を持った事柄について研究を行ったものである。また、従来と異なることは、各専門分野の担当者からアドバイスを受け内容の充実が行われたことである。

(2) 課題

a) 個人研究において、生徒の中には実際に現地に行き確認を行う予定の生徒がいたが、なかなかスケジュールにゆとりがなく困難であった。

b) 今回、語学の習得に力をいれた形の校外学習であったが予想されたより語学の習得度の達成は調査できなかった。

c) 学習ノートについては大変内容の深いものであったが、活用において予定より時間が取れず、予想された活用ができなかった。

d) 校外学習において、交流会・ホームステイに力を入れたが当初、交流校の生徒とホームステイ受け入れ家庭ができるだけ一致する方向で実施を計画したが一致した例は少なかった。